

博士論文（要約）

論文題目 久生十蘭研究

氏名 阿部 真也

目次

第一部

第一章 演劇人から探偵小説家へ——『黒い手帳』論……………4

第二章 故郷喪失者の感性——『湖畔』論……………20

第三章 演劇と探偵小説的登場人物——『刺客』『ハムレット』論……………37

第二部

第四章 魔境冒険小説からの逸脱——『地底獣国』論……………53

第五章 滅亡の感性——『新残酷物語』『美国横断鉄路』論……………70

第六章 南方徴用体験——『内地へよろしく』を通して……………87

第三部

第七章 GHQの検閲と占領への自己言及——『だいこん』論……………105

第八章 占領期文学の方法——『予言』論……………122

第九章 戦後の終焉——『肌色の月』を中心に……………136

初出一覧……………150

本文

五年以内に出版予定。

参考文献一覧

【全集】

- 『久生十蘭全集』全七巻（三一書房、一九六九・七〇年）
『定本 久生十蘭全集』一一巻＋別巻（国書刊行会、二〇〇八・一三年）

【久生十蘭作品】

- 『金狼』（「新青年」昭11・7・11）
『黒い手帳』（「新青年」昭12・1）
『黒い手帳』（「探偵実話」特別増刊、昭27・3）
『湖畔』（「文藝」昭12・5）
『湖畔』（「モダン日本」読物シリーズ、昭22・10）
『湖畔』（「オール読物」昭27・4）
『湖畔』（『うすゆき抄』（「文藝春秋新社、昭27・9））
『刺客』（「モダン日本」昭13・5・6）
『ハムレット』（「新青年」昭21・10）
『地底獣国』（「新青年」昭14・8・9）
『計画・Яー又は、地底の攻略路―』（久生十蘭『魚雷に跨りて』春陽堂書店、昭17・2）
『地底の獣国』（「探偵実話」昭27・3）
『キヤラコさん』（「新青年」昭14・1・12）
『海豹島』（「大陸」昭14・2）
『新残酷物語』（「文藝春秋」昭19・11）
『美国横断鉄路』（「週刊朝日」昭27・9・5）
『猿の最後の一匹まで』（「大洋」昭19・9）
『（久生氏の意見）』（「週刊朝日」新春増刊新春読物号、昭27・11・30）
『最後の一人』（「青年読売」昭19・9・20・1）
『重吉漂流記』（「小説公園」昭27・1）
『海難記』（「別冊文藝春秋」昭27・6）
『藤九郎の島』（「オール讀物」昭27・9）
『海軍歩兵』（「文藝春秋」昭19・5）
『内地へよろしく』（「週刊毎日」昭19・7・2・同12・24）
『従軍日記』（引用は、『定本 久生十蘭全集』10（国書刊行会、二〇一一年）に拠る）
『要務飛行』（「日の出」昭19・10・20・3）
『すたいる』（「婦人朝日」昭22・7・23・1）
『カストリ侯実録』（「文藝春秋」昭24・2）

- 『風祭り』(「苦楽」昭24・6)
『生霊』(「新青年」昭16・8)
『豊年』(「サンデー毎日」昭17・12・20)
『天国の登り口』(「オール読物」昭28・11)
『作者の言葉』(「週刊毎日」昭19・6・25)
『激流』(「京城日報」朝刊、昭14・10・20・15・2・23)
『だいこん』(「モダン日本」昭22・1、2、4、6、9、12、昭23・1、6、8)
『だいこん』(大日本雄弁会講談社、昭24・12)
『予言』(「苦楽」昭22・8)
『妖術』(「令女界」昭13・1・9)
『皇帝修次郎三世』(「新風」昭21・2・12)
『花合せ』(「婦人文庫」昭21・5)
『風流』(「北海道新聞」昭22・6・12・7・10)
『フランス伯N・B』(「文藝春秋」昭23・1)
『氷の園』(「夕刊新大阪」昭24・10・13・25・5・9)
『母子像』(「読売新聞」昭29・3・26・28)
『肌色の月』(「婦人公論」昭32・4・8)
『肌色の月』(中央公論社、昭32・12)
『われらの仲間』(「新潟日報」昭30・10・1・31・4・20)
『ココニ泉アリ』(「読売新聞」昭23・4・24・8・24)
『作者の言葉』(「毎日新聞」夕刊、昭29・10・21)
『重吉漂流記』(「小説公園」昭27・1)
『蜂雀』(NHK第一放送、昭32・1・4)
『いつ また あう』(「りぼん」昭32・9・10)
『喪服』(「文学界」昭32・7)

【同時代資料】

- 江戸川乱歩「日本探偵小説の多様性について」(「改造」昭10・10)
谷崎潤一郎『白昼鬼語』(「東京日日新聞」大7・5・23・7・7・10)
海野十三『電気風呂の怪死事件』(「新青年」昭3・4)
江戸川乱歩「探偵小説純文学論を評す」(『幻影城』(岩谷書店、昭26・5)
平林初之輔「探偵小説壇の諸傾向」(「新青年」大15・2増刊)
甲賀三郎「探偵小説はこれからだ」(「東京日日新聞」昭6・7・16・17)
大下宇陀児「探偵小説の型を破れ」(「東京日日新聞」昭6・7・23)
甲賀三郎「探偵小説講話」(「ぶろふいる」昭10・1・12)

- 木々高太郎「愈々甲賀三郎氏に論戦」(「ぶろふいる」昭11・3)
- 甲賀三郎「新探偵小説論」第二部(『新文芸思想講座』第八卷(文藝春秋社、昭9・5))
- 大下宇陀児、渡辺啓助、海野十三、延原謙、久生十蘭、城正幸、荒木十三郎、松野一夫、(記者)水谷準「探偵作家四方山座談会」(「新青年」昭14・5)
- 阿部正雄『骨牌遊びドミノ(五幕)』(「悲劇喜劇」昭4・3)
- ルイヂ・ピランデルロ作 本多満津二訳『六人の登場人物』(金星堂、大13・9)
- 夢野久作『暗黒公使』(新潮社、昭8・1)
- 小栗虫太郎『完全犯罪』(「新青年」昭8・7)
- 水谷準「久生十蘭の横顔」(「宝石」昭32・12)
- 甲賀三郎「梅雨季のノートから」(「新青年」昭9・9)
- 大下宇陀児「探偵小説の批評について」(「新青年」昭9・12)
- 浜尾四郎「筆の犯罪」(「東京朝日新聞」昭5・12・15・19)
- ルイヂ・ピランデルロ作 北村喜八訳『みんな尤もだ』(原始社、大14・11)
- 常野知哉「生社」時代のエピソード」(「海峡」昭35・11)
- 本多満津二「序」(ルイヂ・ピランデルロ作 本多満津二訳『六人の登場人物』(金星堂、大13・9))
- 北村喜八「序」(ルイヂ・ピランデルロ作 北村喜八訳『みんな尤もだ』(原始社、大14・11))
- 宅昌一「ピランデルロの戯曲について」(「築地小劇場」大14・12)
- ルイヂ・トネツリイ 長谷川牧夫抄訳「ピランデルロの戯曲に就いて」(「築地小劇場」大15・2)
- 荻野完二「アドリアーノ・ティルゲルが見たルイヂ・ピランデルロの演劇」(「劇と評論」昭2・10・11)
- 佐藤雪夫「作者及び作品解題 伊太利現代劇に就いて」(『世界戯曲全集』第三十八卷(世界戯曲全集刊行会、昭4・7))
- 岩田豊雄「ピランデルロの演劇」(「劇場と書齋」モダン日本社、昭17・6)
- 阿部正雄「クノックの演出」(文学座第一回試演パンフレット、昭13・3)
- 江戸川乱歩『D坂の殺人事件』(「新青年」大14・1増刊)
- 小林秀雄「故郷を失った文学」(「文藝春秋」昭8・5)
- 正木不如丘「恋愛学」(「新青年」昭4・1・10)
- 江戸川乱歩『湖畔亭事件』(「サンデー毎日」大15・1・5)
- 海野十三『人間灰』(「新青年」昭9・12)
- 横溝正史『真珠郎』(「新青年」昭11・10・12・2)
- 江戸川乱歩『魔術師』(「講談倶楽部」昭5・7・6・5)
- 山本禾太郎『仙人掌の花』(「獵奇」昭7・1)

- ルイーズ・キャレリ作、岩崎純孝訳『仮面と顔（三幕）——グロテスク劇——』（『世界戯曲全集』第三十八巻、世界戯曲全集刊行会、昭4・7）
- 竹内好「近代主義と民族の問題」（『文学』昭26・9）
- 江戸川乱歩『孤島の鬼』（『朝日』昭4・1・5・2）
- 太宰治『斜陽』（『新潮』昭22・7・10）
- 「編輯室」（『文藝』昭12・5）
- 中島親「おゝ探偵小説よ！」（『シユピオ』昭12・6）
- 夢野久作「探偵小説の真使命」（『文芸通信』昭10・8）
- 海野十三「探偵小説を萎縮させるな」（『ぶろふいる』昭11・5）
- 江戸川乱歩『緑衣の鬼』（『講談倶楽部』昭11・1・12・2）
- 小酒井不木「性的犯罪と探偵」（『新青年』大13・8）
- 江戸川乱歩「性慾の犯罪性」（『世界犯罪叢書月報』（天人社、昭5・11）（引用は『江戸川乱歩全集』第24巻（光文社、二〇〇五年）に拠る）
- 甲賀三郎『嵐と砂金の因果律』（『探偵趣味』昭元・10）
- 有島生馬「現代伊太利文学概観」（『現代世界文学篇』（上）新潮社、一九三〇年）（無署名）「ルイーズ・ピランデルロ小伝」（『築地小劇場』大13・10）
- 編輯部「湖畔」に就いて」（『オール読物』昭27・4）
- 江戸川乱歩「日本探偵小説の多様性について」（『改造』昭10・10）
- 横溝正史「探偵小説の簡便化」（『文芸通信』昭10・8）
- 大下宇陀児「探偵小説不自然論」（『ぶろふいる』昭10・1）
- 野上徹夫「探偵小説の芸術化」（『探偵春秋』昭12・1）
- 木々高太郎「蜘蛛の巣と手術死」（『新青年』昭11・12）
- 木々高太郎『債権』（『探偵春秋』昭12・7）
- 夢野久作『ドグラ・マグラ』（松柏館書店、昭10・1）
- コナン・ドイル 三上於菟吉訳『空家の冒険』（『世界探偵小説全集』第四巻（平凡社、昭4・10））
- 荒正人「第二の青春」（『近代文学』昭21・2）
- 小田切秀雄「新文学創造の主体——新しい段階のために——」（『新日本文学』昭21・6）
- 白井明「探偵小説の復活」（『読売新聞』昭22・10・13）
- 江戸川乱歩『陰獣』（『新青年』昭3・8増刊・10）
- 田村泰次郎『肉体の門』（『群像』昭22・3）
- 「死に絵と「死の島」 怪奇な装飾品に囲まれて」（『報知新聞』昭5・11・26）
- 横溝正史『首吊り三代記』（『探偵』昭6・5）
- 徳川義親『最後の殿様』（講談社、一九七三年）
- シェークスピア 坪内逍遙訳『ハムレット』（『新修シェークスピア全集』第二十七巻（中

- 央公論社、昭8・9)
- 江戸川乱歩「動機の問題」(「宝石」昭25・8・11)
- 木々高太郎「探偵小説入門」(「別冊宝石」昭28・5)
- 江戸川乱歩『探偵小説四十年』(桃源社、一九六一年)
- 小栗虫太郎『有尾人』(「新青年」昭14・5・6)
- 渡辺啓助『たちあな探検隊』(「新青年」昭14・1)
- 「編輯さろん」(「新青年」昭14・10)
- 昇曙夢『明暗ソ聯の全貌』(育生社、昭13・10)
- 朝日時局読本第十卷『戦時体制下のソ聯』(朝日新聞社、昭12・10)
- 延原謙、吉岡龍、海野十三、角田喜久雄、横溝正史らの連作『諏訪未亡人』(「新青年」昭7・2)
- 蘭郁二郎『地底大陸』(「小学六年生」昭13・4・14・3)
- 渡辺啓助『砂悪魔』(「新青年」昭14・5)
- 橘外男『燃える地平線』(「新青年」昭14・6・8)
- 三島霜川『前代未聞地底世界旅行』(「冒険世界」明41・7)
- 小栗虫太郎「千社礼奇験膏藥」(「新青年」昭9・9)
- 「講和会議後に来るもの 極東情勢、樂觀許さず 日本の運命、西欧と共に」(「朝日新聞」朝刊、昭26・9・11)
- 轟夕紀子「私はキヤラコさん」(「新青年」昭14・11)
- 水谷準「受動的で多面相を持つ作家―『久生十蘭全集』1」(「朝日ジャーナル」昭45・2・8)
- 『韓国施政年報』明治三十九年明治四十年(統監官房、一九〇八年)
- 『省政彙覧』第三輯(満洲国国务院総務庁情報処、一九三六年)
- 「鎖国傾向を濃化 ひとすら国内弥縫に迫はる 外交陣に猜疑の眼」(「東京朝日新聞」朝刊、昭13・1・7)
- 「ソ聯の鎖国政策」(「東京朝日新聞」朝刊、昭13・4・18)
- 内閣情報部監修『流言・デマの正体』(内閣情報部、一九三七年)
- ジュールス・ヴェルネー「三木愛華・高須墨浦訳」拍案驚奇『地底旅行』(九春堂、明18・2)
- 江戸川乱歩『悪夢』(「新青年」昭4・1)
- 次号予告(「新青年」昭14・7)
- 「両院の講和論議から」(「朝日新聞」朝刊、昭26・11・19)
- 「ソ連、進駐出来ぬ 講和条約の発効後」(「朝日新聞」朝刊、昭26・10・24)
- 小栗虫太郎『火礁海』(「新青年」昭15・5)
- 「米国及英国ニ対スル宣戦ノ詔書」(昭16・12・8)
- 「決戦与論指導方策要綱」(昭19・10・6)
- 「重傷のわが兵士を 逆さに生理め 血を絞られた抑留邦人」(「朝日新聞」朝刊、昭19・

8・4)

「世界の獣国アメリカ 排日移民法の暴虐を忘るな」(「読売報知」朝刊、昭18・7・2)

中野五郎『警鐘』(起山房、昭18・10)

河村幽川『カリホルニア開化秘史』(公人書房、昭8・11)

河村只雄『米国黒人の研究』(藤井書店、昭18・10)

「大東亜会議事速記録」(昭18・11)(引用は、『東條内閣総理大臣機密記録』(東京大学出版会、一九九〇年)に拠る)

「今次戦争ノ呼称並ニ平戦時ノ分界時期等ニ関スル件」(昭16・12・12)

山崎靖純『大東亜共栄圏の確立』(文川堂書房、昭19・1)

陸軍省報道検閲係「新聞掲載事項許否判定要領」(昭12・9・9)

石川達三『生きてゐる兵隊』(中央公論)昭13・3)

内務省警保局図書課「出版警察報」第百拾七号(昭14・2)

保田與重郎「玉碎の精神」(通信協会雑誌)昭18・10)

竹内好「近代主義と民族の問題」(「文学」昭26・9)

白井吉見「国民文学」(「群像」昭27・7)

丸山真男「日本におけるナショナリズム」(「中央公論」昭26・1)

伊藤整、白井吉見、折口信夫、竹内好「国民文学の方向」(「群像」昭27・8)

「米英の搾取に沈淪 半植民地へ逆行 財政窮乏に重慶の狂態」(「朝日新聞」夕刊、昭18・10・22)

「米英、金権で蔣を籠絡 空手形乱発 植民地化へ」(「朝日新聞」朝刊、昭18・11・3)

「米英の傀儡たるを 重慶自ら暴露す 機関紙語るに落つ」(「読売報知」夕刊、昭18・11・14)

「重慶、傀儡化に拍車」(「朝日新聞」朝刊、昭18・9・17)

東京刑事地裁報告「被告人石川達三外二名に対する新聞紙法(安寧秩序紊乱)違反事件第一審判決」(昭13・9)(引用は、現代史料集41『マス・メディア統制』2(みすず書房、一九七五年)に拠る)

「(大宅壮一氏の見解)」(「週刊朝日」新春増刊新春読物号、昭27・11・30)

「「美国横断鉄路」をめぐるつて」(「週刊朝日」新春増刊新春読物号、昭27・11・30)

福田恆存「国民文学について」(「文学界」昭27・9)

江戸川乱歩「残虐への郷愁」(「新青年」昭11・9)

江戸川乱歩「郷愁としてのグロ作家」(「読売新聞」朝刊、昭10・8・18)

伊藤整「昭和十八年度の作品について——印象に残った作品——」(「新潮」昭18・12)

「わが建設要衝狙ひ 敵機の反攻本格化」(「読売報知」朝刊、昭18・9・17)

平櫛孝「戦時下美術家への要望」(「南方画信」昭17・12)

- 阿部知二『火の島―ジャワ・バリ島の記―』（創元社、昭19・7）
- 武田麟太郎『ジャワ更紗』（筑摩書房、昭19・12）
- 火野葦平『土と兵隊』（『文藝春秋』昭13・11）（引用は、火野葦平『土と兵隊』（改造社、昭13・11）に拠る）
- 「若き人々に告ぐ 特に問題は洋装の女」（『東京朝日新聞』夕刊、昭14・10・22）
- 「酒保」（『週刊毎日』昭19・6・4）
- 「本土戦場化するも揺がず 滅敵に絶好の機 戦略態勢に一大転換」（『朝日新聞』朝刊、昭19・7・19）
- 石川達三「再従軍に際して」（『中央公論』昭13・10）
- 丹羽文雄『海戦』（『中央公論』昭17・11）
- 「大君のために散らん若桜」還らぬ征旅の門出に遺書」（『朝日新聞』朝刊、昭17・3・7）
- 『文藝年鑑』二六〇三年版（昭18・8）
- 座談会「戦争と美術」（『画論』昭18・7）
- 荒城季夫「『近代戦』表現の問題」（『朝日新聞』朝刊、昭18・12・11）
- 「神風隊・鍛へしこの闘魂 仰がん神鷲・体当たりの若桜」（『朝日新聞』朝刊、昭19・10・31）
- 「あゝ若桜、神々の出陣 神風隊出撃映画の感激」（『朝日新聞』朝刊、昭19・11・11）
- 荒正人・小田切秀雄・佐々木基一・埴谷雄高・平野謙・本多秋五・小林秀雄を囲んで」（『近代文学』昭21・2）
- 丸山真男「日本の思想」（岩波講座『現代思想』第十一卷（岩波書店、一九五七年））（引用は、丸山真男『日本の思想』（岩波書店、一九六一年）に拠る）
- 「遺影に誓ふ滋野男の遺児 空へ、父譲りの熱血 ジャンヌさんも志願の希ひ許す」（『読売報知』朝刊、昭18・7・14）
- 「開院式に優渥なる勅語賜ふ 平和国家を確立 挙国自強、国本を培養」（『朝日新聞』昭20・9・5）
- 森戸辰男「平和国家の建設」（『改造』昭21・1）
- 「日本国憲法」（昭22・5・3 施行）
- 「御退位めぐって 皇族方は挙げて賛成 反対派には首相や宮相」（『読売報知』昭21・2・27）
- 「憲法改正後に退位か」（『読売報知』昭21・3・6）
- 「進んで留位・国家再建へ 退いて責免れず」と御決意」（『読売新聞』昭23・11・24）
- 横溝正史『本陣殺人事件』（『宝石』昭21・4・12）
- 横溝正史『獄門島』（『宝石』昭22・1・23・10）

- 「プレスコード（日本に与うる新聞遵則）」（昭20・9・19）（引用は、『日本新聞年鑑』昭和二三・四年（日本新聞協会、一九四八年）に拠る）
- 東久邇宮稔彦『私の記録』（東方書房、昭22・4）
- 「表面に出た『憲法改正』国会も政府も慎重の構え」（『朝日新聞』昭23・8・22）
- 横田善三郎「天皇退位論」（『読売新聞』昭23・8・26）
- 太宰治『苦悩の年鑑』（『新文芸』昭21・6）
- 太宰治『十五年間』（『文化展望』昭21・4）
- 「天皇を免除の理由 ウェッブ裁判長談 連合国の利益に基く」（『朝日新聞』昭23・11・13）
- 「天皇不起訴の理由 キーナン検事語る」（『朝日新聞』昭23・11・21）
- 「日本警察力の増強 アイケルバーガー中将再び強調」（『読売新聞』昭24・2・7）
- 「佐藤次郎選手、馬拉加海峡で投身」（『大阪朝日新聞』号外、昭9・4・6）
- 「音楽家久野久子女史、ウインで自殺を図る」（『東京朝日新聞』朝刊、大14・4・22）
- 22）
- 江戸川乱歩「探偵小説の方向」（『夕刊新大阪』昭21・9・16・19）
- 「珍しい意志の人」（『東京朝日新聞』朝刊、大14・4・22）
- 「不幸つゞきでいたましい一生」（『東京朝日新聞』朝刊、大14・4・22）
- 久生幸子「あとがき」（久生十蘭『肌色の月』、中央公論社、一九五七年）
- 剣聖会編『大日本帝国勲章記章誌』（崇文堂、一九三七年）
- 小酒井不木『催眠術戦』（『苦楽』大15・4）
- 城田シュレーダー『魔石』（『探偵』昭6・11）
- 小栗虫太郎『青い鷺』（『ぶろふいる』昭11・11・12・4）
- 昭和三一年度『経済白書』（昭31・7・17）
- 中野好夫「もはや『戦後』ではない」（『文藝春秋』昭31・2）
- 志賀直哉『灰色の月』（『世界』昭21・1）
- 上林暁「文芸時評」（『新文芸』昭21・2）
- 河上徹太郎「老作家の世界——文芸時評——」（『文藝春秋』昭21・2）
- 日比野士朗「敗戦と作家——文芸時評——」（『東北文学』昭21・4）
- 野間宏「文化時評」（『季刊大学』昭21・4）
- 白井吉見「展望」（『展望』昭21・8）
- 織田作之助「可能性の文学」（『改造』昭21・12）
- 太宰治「如是我聞」（四）（『新潮』昭23・7）
- 平野謙「文芸時評」（下）（『文化新聞』昭21・3）
- 荒正人「民衆とはたれか」（『近代文学』昭21・4）
- 小田切秀雄「新文学創造の主体——新しい段階のために——」（『新日本文学』昭21・6）

- 志賀直哉「続々創作余談」(「世界」昭30・6)
- 宇野浩二「志賀直哉の文章」(「世界」昭31・3)
- 佐々木基一「戦後の文学」(荒正人等編著『昭和文学史』下巻(角川書店、昭31・12))
- 野間宏『顔の中の赤い月』(「綜合文化」昭22・8)
- 高山毅「小説とは何ぞや(文芸時評)」(「青年論壇」昭22・11)
- 「貸金業等の取締りに関する法律」(昭24・5・31公布)
- 「出資の受入れ、預り金及び金利等の取締りに関する法律」(昭29・6・23公布)
- 「東京のヤミ金融王 川村と義兄弟の契り」(「読売新聞」夕刊、昭25・4・29)
- 服部達「新世代の作家たち」(「近代文学」昭29・1)
- 高見順、堀田善衛、三島由紀夫、吉行淳之介、村上兵衛、石原慎太郎、木村徳三「戦前派
戦中派 戦後派」(「文芸」昭31・7)
- 鮎川信夫「推理小説論(続き)」(『世界推理小説全集』第三十三卷月報(東京創元社、昭
32・1))
- 横溝正史『蝶々殺人事件』(「ロック」昭21・5・22・4)
- 坂口安吾『不連続殺人事件』(「日本小説」昭22・9・23・8)
- 高木彬光『刺青殺人事件』(岩谷書店、昭23・5)
- 横溝正史『深紅の秘密』(「新青年」大10・8増刊)
- 甲賀三郎『緑色の犯罪』(「新青年」昭3・12)
- 海野十三『赤外線男』(「新青年」昭8・5)
- 小栗虫太郎『失楽園殺人事件』(「週刊朝日」昭9・3)
- 木々高太郎『緑色の目』(「週刊朝日」昭11・8)
- 「公団預金を浮貸し 東海の八千万円事件から各銀行へ波及 背後に代議士も介在か」(「読
売新聞」朝刊、昭24・10・18)
- 「浮貸し五十八回 一億数千万円 全農の元経理局員が」(「朝日新聞」朝刊、昭25・5・
2)
- 小宮悦造・古庄乙彦『臨牀血液図説』第2輯(日本医書出版、一九四九年)

【学術論文】

- 荒正人「解説」(『久生十蘭全集』I (三一書房、一九六九年))
- 川崎賢子「久生十蘭論——ハムレットの系譜」(「早稲田文学」昭58・3)
- 草森紳一「佯狂への道」(「早稲田文学」昭58・12)
- 清水邦夫「久生十蘭の『語り』と『騙り』」(日本探偵小説全集8『久生十蘭集』(東京創
元社、一九八六年))
- 須田千里「恋愛小説としての『湖畔』久生十蘭論I」(小泉道・三村晃功編『女と愛と文
学』(世界思想社、一九九三年))
- 後藤隆基「大正末期から昭和初期における探偵小説と演劇の交差——江戸川乱歩宛長谷川

- 伸書簡群を視座として」(「大衆文化」平29・3)
 渡部直己「Règle de Trois——あるいは「計算」された物語」(「早稲田文学」昭58・11)
 笠井潔「日本幻想作家論③久生十蘭——象徴の顕現と消滅」(「幻想文学」昭61・3)(引用は、笠井潔『物語のウロボロス』(筑摩書房、一九九九年)に拠る)
 内田隆三『乱歩と正史』(講談社、二〇一七年)
 中井英夫「解説」(『久生十蘭全集』Ⅲ(三一書房、一九七〇年))
 都筑道夫「男ぶりの小説、女ぶりの小説」(久生十蘭傑作選Ⅴ『無月物語』(社会思想社、一九七七年))
 北村薫『湖畔』における愛の生活とは」(「小説すばる」平10・3)
 惟任将彦「湖畔の夢——久生十蘭「湖畔」をめぐる迷路的考察——」(「嚙喰」平11・3)
 小林幹也「読者をあざむく文体——久生十蘭「湖畔」論——」(「近畿大学日本語・日本文学」平20・3)
 深澤仁智「湖畔」のたくらみ——久生十蘭「湖畔」論」(「日本文芸論叢」平25・3)
 澁澤龍彦「解説」(『久生十蘭全集』Ⅱ(三一書房、一九七〇年))
 中田耕治「幕が下りるまで」(『久生十蘭全集』内容見本)三一書房、一九六九年)
 江口雄輔「解題」(『定本 久生十蘭全集』1(国書刊行会、二〇〇八年))
 山本健吉「国語・国語・国民——国民文学についての覚書——」(「理論」昭27・8)
 権田萬治「宿命の美学——夢野久作論」(「みすてりい」昭39・10)(引用は、権田萬治『日本探偵作家論』(双葉社、一九九六年)に拠る)
 武井孝文「久生十蘭と戦後——「ハムレット」と「だいこん」を中心に——」(「文芸研究」平21・3)
 井上諭一「久生十蘭「地底獣国」の方法——物語の過剰——」(「弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要」平2・3)
 永井太郎「地下世界の近代」(「福岡大学人文論叢」平21・9)
 川崎賢子「地底獣国の入口をめぐる」(前)・(後)、「SFの本」昭59・11、60・4)
 須田千里「白雪姫」の材源と語り——久生十蘭論Ⅷ——」(「国語国文」令2・6)
 中野美代子「刻鏤無形」(久生十蘭傑作選Ⅲ『地底獣国』社会思想社、一九七六年)
 浜田雄介・沢田安史「解題」(『定本 久生十蘭全集』3、国書刊行会、二〇〇九年)
 川崎賢子「もっと知りたい久生十蘭のこと——戦争期、彼の場合」(「幻想文学」平2・9)(引用は、川崎賢子『蘭の季節』(深夜叢書社、一九九三年)に拠る)
 鈴木貞美「転向の逆説」(「思潮」平元・6)(引用は、鈴木貞美『昭和文学』のために——フィクションの領略』(思潮社、一九八九年)に拠る)
 川崎賢子・沢田安史「解題」(『定本 久生十蘭全集』5、国書刊行会、二〇〇九年)
 中井英夫「行届いた配慮による編集」(「週刊読書人」昭50・6・30)

- 浜田雄介・江口雄輔・川崎賢子「解題」(『定本 久生十蘭全集』8、国書刊行会、二〇一〇年)
- 橋本治「凧の海」(『日本幻想文学集成』⑫、国書刊行会、一九九二年)
- 五味洸典嗣「曖昧な戦場——日中戦争期戦記テクストと他者の表象」(『昭和文学研究』平26・9)(引用は、五味洸典嗣『プロバガンダの文学』(共和国、二〇一八年)に拠る)
- 尹小娟「久生十蘭における南方徴用—前線の日常を描く—」(『Comparatio』平30・12)
- 大貫恵美子『ねじ曲げられた桜』(岩波書店、二〇〇三年)
- 川崎賢子「少女たちの戦後——「だいこん」から「我が家の楽園」まで」(『ユリイカ』平元・6)
- 江口雄輔『久生十蘭』(白水社、一九九四年)
- 都築道夫「解説」(久生十蘭『真説・鉄仮面』(桃源社、一九六九年)
- 川崎賢子「解題」(『定本 久生十蘭全集』6、国書刊行会、二〇一〇年)
- 開信介「久生十蘭「予言」論——二重化された語り——」(『歴史文化社会論講座紀要』平30・3)(引用は、開信介『久生十蘭作品研究——〈霧〉と〈二重性〉』(和泉書院、二〇二三年)に拠る)
- 大津仁昭「久生十蘭『予言』論」(『Es問氷期』平20・11)
- 都築道夫「解説」(久生十蘭『巴里の雨』、出帆社、一九七四年)
- マイク・モラスキー 鈴木直子訳『新版 占領の記憶 記憶の占領』(岩波書店、二〇一八年)
- 川崎賢子「遊星『新青年』からとどく光は——久生十蘭へ／久生十蘭から」(『駿台フォーラム』平3・7)
- 植島啓司「ポルノグラフィ—的想像力連載19——久生十蘭「予言」」(『IN★POCK ET』平22・7)
- 谷口基「敗戦と怪談——久生十蘭「黄泉から」を中心に」(『文学』平26・7)
- 清水一彦「『もはや「戦後」ではない』という社会的記憶の構成過程」(『江戸川大学紀要』平27・3)
- 平浩一「『戦後』の日付——志賀直哉「灰色の月」と『世界』、あるいは太宰治」(『内海紀子・小澤純・平浩一編『太宰治と戦争』(ひつじ書房、二〇一九年)
- 江口雄輔・川崎賢子・沢田安史・浜田雄介「解題」(『定本 久生十蘭全集』10、国書刊行会、二〇二一年)

論文の内容の要旨

論文題目 久生十蘭研究

氏名 阿部真也

本研究は、従来その異端性が評価され、特定のジャンルや国家、時代に留まらず、時に「小説の魔術師」や「コスモポリタニスト」などとも評された久生十蘭の、戦前・戦中・戦後にわたる創作活動を、敢えて、十蘭が小説の執筆を開始した探偵小説ジャンルや時代状況の中に限定して捉えることで、十蘭作品、また探偵小説ジャンルが帯びる時代性を浮き彫りにし、その同時代の社会に対して持つ批評性を明らかにすることを目指したものである。特に昭和十年前後以降の探偵小説ジャンルにおいて確固として存在する「本格探偵小説」という物語の枠組みからの偏差を測定し、十蘭作品の持つズレが時代状況の中で担う役割を分析した。大衆小説内の一ジャンルが時代や社会と切り結ぶ様を明らかにすることを通して、狭義の文壇が取りこぼしていたとも言える、日本近代文学の別の側面を浮かび上がらせることを企図した。

本研究は全三部から成る。第一部においては、戦前の十蘭作品を取り上げ、他の探偵小説との比較から、その特異性を明らかにすると共に、改稿・改作の過程も検討し、戦前の探偵小説ジャンルにおける作品が、戦後文壇において批評的な価値を持つという展開の見通しを示した。

第一章「演劇人から探偵小説家へ——『黒い手帳』論——」では、十蘭が作家的主題を見出したと考えられる初期作品『黒い手帳』（昭12）を取り上げ、当初演劇界で活動を開始した久生十蘭が探偵小説家へ転じる様を跡付け、その創作活動の始発を明らかにした。十蘭が影響を受けたことを公言するイタリアの劇作家ピランデッロから、物語の因果的な統一を拒絶する手法を学び、それが時の探偵小説界において、明確に理念化されていた「本格探偵

小説」という枠組みに適応されていることを指摘し、そこに人間の生死にまつわる因果が不明瞭な、ニヒルな世界が出現することを論じた。それは「変格探偵小説」が議論から排斥され、「本格」ばかりが祭り上げられる、時の探偵小説界において、エロ・グロ・ナンセンスの題材によってではなく、「本格」という、作品の論理構造からの逸脱によって実現された、新たな形態の「変格」として評価できることを論じた。

第二章「故郷喪失者の感性——『湖畔』論——」では、『黒い手帳』に次いで発表された『湖畔』(昭12)を、探偵小説ジャンルが描いてきた都会の放浪者・散歩者の孤独感を背景に持つ、共同体意識を問題化する作品として定位した。典拠であるキアレツリ『仮面と顔』との比較から作品の生成過程を明らかにすることを補助線としつつ、個人の存在理由という意味を組み立てる「本格」の枠組みを利用して、血縁的な紐帯の持つ拘束力を具現化した上で、殺人事件が不履行に終わることによって、己を緊縛する帰属意識から解放され、幻想世界が姿を現すことを論じた。また、戦後における改稿・再発表の意義の分析を通して、時代状況に照らし合わせて、作品が国家という共同体概念の絶対性を相対化する批評性を獲得していることを明らかにし、更には戦前の「故郷喪失」の感性が、戦後の「祖国喪失」の感性に接続されているという、戦争を跨いだ十蘭作品の展開の展望を提示した。

第三章「演劇と探偵小説的登場人物——『刺客』『ハムレット』論——」では、『刺客』(昭13)、『ハムレット』(昭21)を通して、十蘭作品における演劇と探偵小説との関係を、登場人物の性格描写という観点から再度考察した。「本格」においては、登場人物の性格描写から固有性を棄却することで、却って、固有性を伴った死の因果を構築できるが、十蘭作品においてはそれを逆手に取り、あたかも性格劇の役者のように、特定の役割を演じる、記号のような登場人物を描いた上で、獲得できるはずであった必然的な死さえも崩壊させ、徹底して虚無的な人間存在を現出させることを明らかにした。また戦後の改作『ハムレット』においても、ニヒリズムは踏襲され、虚無的な人間像は、戦後文壇の鍵語である「主体性」の反措定として、戦後日本の無根拠性を突く、戦後批判としての意味を持つことを論じた。

第二部においては、戦中の十蘭作品を取り上げ、時代的・国家的な価値観へ順応すると同時に逸脱する様相を追った。

第四章「魔境冒険小説からの逸脱——『地底獣国』論——」では、地底世界を描く『地底獣国』(昭14)を通して、この時期に多くの探偵小説家たちが時代的な要請から着手した「冒険小説」の批評的な可能性について考察した。未開世界の土地・資源・財宝の奪取をめぐる国際的な闘争を描くことをジャンルのコードとする「冒険小説」を中途まで演じながらも、最終的にはその期待される結末が不成立に終わる様を通して、不条理な空間を出現させる本作の機構を指摘した。またそのようにして描かれる不定形態の地底世界が、ノモンハン事件にて日本とソ連とが武力衝突を引き起こしていた作品発表の当時において、また日本がサンフランシスコ講和条約を締結し、単独講和の結果として、ソ連による侵略行動を再度危惧する、作品が再発表された戦後において、近代国民国家の自明性に対して亀裂を入れる批評性を獲得していることを論じた。

第五章「滅亡の感性——『新残酷物語』『美国横断鉄路』論——」では、十蘭作品が戦中に時代と共鳴してしまった様相、およびその戦後への展開を分析した。『新残酷物語』(昭19)では、アメリカ人の手によって、日本人・中国人が一人残らず殺される過程が描かれ、その滅亡を媒体として、戦中の運命共同体的な感性が表れている。しかし、その滅亡は、戦前の探偵小説ジャンルが得意としたグロテスクな描写を伴うために、一見、同時代の「玉砕」の賛美と文脈を共有しながらも、それを突き抜け、戦時共同体を内側から問い直す契機にもなっていることを明らかにした。また戦後に改稿・改題を経て再発表された『美国横断鉄路』(昭27)においても、時代錯誤にも、戦時の運命共同体的な感性が表れ、それが同時代の日本再建をめぐる議論に対して、国家という共同体概念そのものが孕む暴力性・非絶対性を剔抉する批評性を有していることを論じた。

第六章「南方徴用体験——『内地へよろしく』を通して——」では、久生十蘭の南方徴用体験を検討した。『内地へよろしく』(昭19)を、十蘭の徴用体験と、「絶対国防圏」が破られるという、太平洋戦争末期の重大な戦局の変化が交差する地点に位置づけ、前線と銃後とを包含する、共に滅亡へと向かう共同性が表れていることを明らかにした。また、この運命共同体的な感性を端的に表す「秋になれば葉が落ちる」という表現が、戦後の十蘭作品にも、没落貴族のモチーフとして変奏された上で、反復的に現れていることを指摘し、滅亡の感性を以て戦中と戦後を連続的に捉える十蘭の姿勢が、主体性・個人主義を重視する戦後文壇において、戦争の当事者として、国家という共同体の枠組みそのものが孕む危険性を炙り出す批評性を発揮することを論じ、本章を以て、戦中から連続性を有する戦後の十蘭作品の時代に対する基本戦略を示した。

第三部においては、戦後の時代状況との相互作用の中で作品が成立する様相を明らかにした。

第七章「GHQの検閲と占領への自己言及——『だいこん』論——」では、『だいこん』(昭22-23)が、GHQの検閲による処分や、作品が〈あの方〉として取り上げる天皇をめぐる議論との相互作用の中で成立する様を段階的に追跡した。占領に対する屈辱感と同時に、戦争への生理的な嫌悪感(終戦の解放感)を覚えるという、日本人の屈折する思いを対象化しようと試みながらも、検閲によって占領への自己言及が封殺されたために、占領が国家間の関係の問題から、日本人の心構えの問題へ転じ、敗戦を運命論的な滅亡として把握することを余儀なくされたという、本作に見られる方針転換を指摘した。また、単行本版(昭24)においては、当初退位が確定的であったために作中で滅亡のモチーフとして機能していた天皇が、一転して留位を表明したという現実の情勢の変化によって、一貫性を見せる本作が、恣意的な転換を見せるアメリカの占領政策に潜む欺瞞を浮かび上がらせる批評性を獲得していることを明らかにした。

第八章「占領期文学の方法——『予言』論——」では、『だいこん』連載中に発表された『予言』(昭22)を、検閲をかいくぐるために、「没落貴族」「コキュ」のモチーフを用いて婉曲的に戦後日本を対象化する寓意小説として評価した。人間の死の必然性・固有性を確定

させる「本格」の結構に重ねて、外国人に妻を寝取られる没落貴族を、戦後においてアメリカの占領下に置かれた日本を表象するメタファーとして描く手法を確認した上で、その殺人、および寓意が崩壊する様を通して、条理を欠いた日本の敗亡を描き、戦後空間が紛れもなく持つ多義性を対象化していることを論じた。同じく検閲が存在する占領下で発表された『だいこん』とはまた異なる、寓意という、検閲の処分を免れるための手法、また戦後日本を描く上での、探偵小説の持つ有効性を本章において明らかにした。

第九章「戦後の終焉——『肌色の月』を中心に——」では、遺作『肌色の月』(昭32)を取り上げ、十蘭の創作活動が戦後約10年を闊した時期に終焉を迎えた、作品表現に内在した必然性を分析した。「もはや「戦後」ではない」というフレーズも用いられる時代において、戦時、また戦後混乱期の非日常を暗示する自殺が挫折し、時に倦怠感すら覚えるような生活を送ることを強られる様を通して、日常への回帰が表現されていることを論じた。ここに、死(滅亡)を通して、その殉じる共同体を探り当てていくという、終戦前後から十蘭作品に一貫して見られたテーマの失効を読み取り、相対的安定期を迎えた日本の時代状況の中に位置づけることで、本研究の締めくくりとした。